



074886-000-4

特67-958

春木座新狂言筋書

大島 直次郎 / 刊

M16

CEK-0317

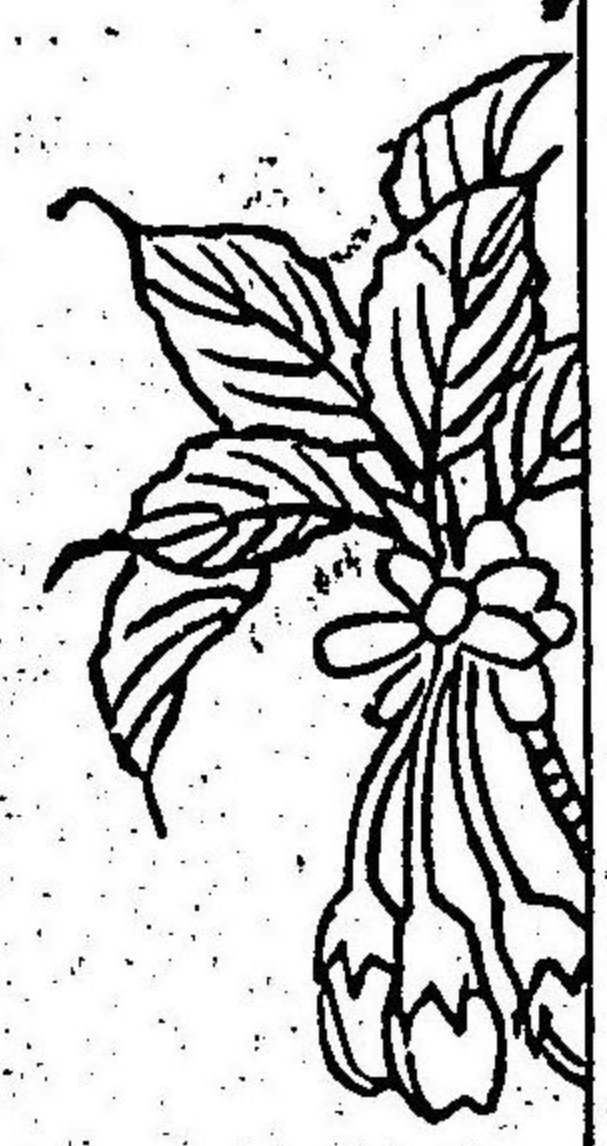


明治十八年三月

春水樓新編書

一冊

新編書



第一番目狂言

張拔筒真田入城

五幕

中幕

新歌舞伎
十八番の内

今様釣狐

長唄はやし連中

第二番目狂言

猿廻門途の

堀川の段

大切所作事

奴道成寺

長唄はやし連中

○場割○三保明神の場 同別當所の場 上田城退去の場

一穴山小介

二やく

市川八百藏

○紀州紀の川の場○九度山村境の場○同幸村閉居の場○

一幸村の室千枝

岩井紫若

同大詰閉居の場○小倉門前の場 同勘當詫の場○釣狐の

一神主左司馬

坂東八平次

場○堀川の場○大切所作事の場

一近臣

同 橘次

○三立目三保明神の場 同別當所の場

一同

市川升藏

○同返し上田退去の場 役人替名

一同

中村甌八

一真田左衛門尉幸村

一百姓

市川幸升

一大野道犬

一同

中村芝歌五郎

一豊田佐渡守

一同

坂東喜知六

一富田平三郎信房

一同

中村銀孝

一野呂七之助保國

一同

此外大勢

一富田信濃守信高

一幸村の一子大助

市川金太郎

一保國妻玉芍

一野呂の侍女

岩井大和

一庄屋佐五兵衛

一同

坂東ゆめ

二やく

市川圓右衛門

「三保明神の場」木舞臺高足の二重真中石の階段正面本社
の書割此まへ葵紋付の幕を張り都て三保明神境内の道具
爰に諸士(升藏橋次斬八)上下大小にて立懸りて(三人)
此度石田光成密謀反と企だて關東を亡さんと軍の用意
頻りなりしが此事早くも徳川殿へ聞え討手來りて取ひし
が光成忽ち敗北なし是に加擔の大小名亡び失し眞田左
衛門尉幸村の關東方の兵を引うけ我居城信州上田へ籠城
あし大軍をくひどめし適れ智勇然るゝ兄伊豆信幸家康殿
へ助命をねがひしところ寛仁大度の内府公終ゝ命をたす
々幸村にのすこゝと開城すといふとさすが幸村も命
が惜く討死せず立退るとの腰ぬけ武士とせりふ渡り何の
格別今日の内幡宮の神前あて家康公に奉幣祈念とよろ
しくゆつゝ向ふを見(升)向ふよりわてやかある婦人が参
るが彼の當時評判のさりやうよし譽田が娘玉高世程大野
道次殿が心されしが彼の大野を忌嫌ひ野呂七之助保國
が妻とありしとの何にいたせ美しくしものト此時向ふ

が保國妻玉くち(小紫)奥方の拵へ跡方こし元(大和佳女
三)付添出て來り花道にて(小紫)けふの夫保國が武運長
久祈りの参詣トせりふある跡が大野道次(猿十郎)上下大
小あて出て(猿十郎)夫へムるの保國殿の内室に参詣お
らば同道いたさう(小)是のく大野さまトせりふ渡つて
皆々舞たいへ來る諸士見て(三人)大野殿おの早いは参
詣(猿)ゆづれも苦勞千萬といさつ有てシ我君よ
の(猿)内府公より追付お出拙者の是にて暫時休息ト床几
へ懸る小紫こなし有て(小)どりや私いんとさまへト立
ふとする猿十郎留(猿)アイヤお親父佐渡殿より疾く社内
お出あれと逢度の其元のお連合保國殿でムらふといふ
(小)今日君の御参夫に用事がわれお迎女子の身で曠
の場所へ参られませうかと是まで諸士皆々言譯召れて
もまだ縁付て間も無れば夫程夫を慕ふと云い浦山一の儀
てムる然し保國殿のいまだ當社へお出かない(小)そりや
夫保國よりまだ参詣いたし升ぬか心懸るとじや下氣の

揉るこちし爰へ神主(新相中)出で只今神前おひて祈念
の用意調へば何れも拜禮下さるべしト是にて諸士の然
らば我々の保國殿も成かはり拜禮いたさんトせりふあつ
て諸士神主付て奥へはいる跡(腰元)殿様おの此所へどう
にお出と思ひしにまだお見えなされぬの合點の行ぬこと
(小)是より仔細があるとか一寸様子ト行懸る(猿)イヤ
く保國殿の君のお供で追付お出の必定まづく爰で休
息召をト留る兩人よろしくわつて(猿)コレ玉苧殿ト是か
兼てそなたに執心故父佐渡殿へ縁邊と申入しに終ゝ保國
へ縁を組今の夫婦おなられしが野呂七之助の悪性もの男
のよみが心實なく頼て不縁とあるの必定廢り物にならぬ
内牛を馬に乗替て此大野が妻になる氣のムらぬかとよる
しく口説小紫おつて(小)てんがうも程がある夫ある
身へ不義の言懸(猿)イヤくてんがうでない大心實ト
猿十郎いやがる小紫を捕へ抱付此時上手が譽田佐渡守(一
圓右)上下大小更さる拵よて出る猿十郎小紫と思ひ抱付

顔を見て向りあしヤア貴様は佐渡殿(圓右)道次殿何とし
召ると是まで猿十郎極りの悪さこちしあつて種々にいひ
紛らしドリヤ参詣を致すでムらふと思入あつて猿十郎上
手へはいる跡(小)父上能所へ(圓右)たわけた奴ぢやシテ
ろちの何用有て是へ参ッ(小)けふの此境内まで武藝の
試合があるぞ聞どうぞ夫は勝せ度心の内にお願ひやて只
今参詣の歸りト云(圓右)夫に勝をせらせ度神へ願ふの尤
もぢや今關東に隠なき保國なんぞ後をせとらん安心をし
て歸宅致せ(小)女のとゆゑ我君の御社参りの穢をなれど
話の種故暫の内ト爰おたいと云こちし(圓右)夫程試合を
見度思ひ拜見をゆるし呉んが女の事故お襖越に(小)そ
りや拜見をお免し下され升るが(圓右)身共も是か別當方
へまわれば汝も同道しやれ(小)お進みされて(圓右)斯來
やれト此摸樣宜しく道具廻る
本ふたい向ふ金地の襖薄縁を敷つめ都て別當所の道具爰
にいせんの大野道次の(猿十)諸士(斬八八平次)扣へ富田

平三郎信房(福助)諸士(橋次)袴(すき)兩人(竹刀)持持へ
る(福助)橋次(イヤ)くく(ト)試合の立廻りよろしくト
い福助橋次と散々打据る(橋)まわつた(ト)兩人(扣)へ
(猿十)富田氏(一人)を打するた(ト)て手柄(あら)す今
に此道(犬)が貴殿(立)わひ見事(打据)ひ(又)入(れ)ん(ト)廣言(て)
吐(く) (福)今日(の)立會(の)一(世)の曠(道)犬(殿)と(お)手合(の)望(む)所
(猿)オ、神妙(なる)志(し)覺悟(し)て待(て)る(や)れ(ト)此時(袂)の
内(より)い(せん)の(升)藏(玉)菊(の) (小紫)を引(立)出(る)跡(を)腰(元)
(大和佳女)三(付)添(出)る(猿十)郎(見)て(猿)ヤア(と)あ(たり)玉(藏)
殿(升)只(今)袂(越)え(玉)菊(殿)が(傍)兩(所)の立(合)を(見)て(橋)井(氏)
が(打)負(た)と(腰)元(共)と(目)引(袖)引(高)笑(ひ)斯(る)無(禮)に(召)進(て)參
つた(小紫)イエ(く)どう(して)其(様)と(升)今(と)あ(つ)て言
分(して)も(拙)者(が)聞(た)ト(是)に(て)橋(次)負(腹)を(立)橋(勝)負(の)時
の(運)それ(が)し(負)た(を)嘲(弄)あ(す)の無(禮)至(極)ト(敵)役(皆)々(せ)り
ふ(渡)る(小紫)決(して)影(言)の(升)引(ト)詫(を)聞(す)敵(役)皆(々)
い(夫)程(人)の(試)合(を)ば(さ)み(あ)す(か)ら(の)玉(菊)殿(も)女(な)が(ら

も(受)ね(わ)らん(サア)我(々)と(立)合(召)ま(ト)詫(を)死(う)す(四)人(小)
紫(を)前(へ)引(出)せ(小)は(無)体(で)ム(り)升(る)と(う)して(女)子(の)私
し(が)ト(猿十)郎(思)入(あ)つ(て) (猿)相(手)よ(ら)ず(ト)最(前)の(拙)者
が(詞)得(心)召(る)か(小)サア(夫)の(猿)但(し)此(場)で(立)合(召)る
か(小)サア(く)く(猿)九(く)納(め)て(進)せ(や)う(ら)終(應)と
得(心)召(れ)ト(志)お(だ)れ(る)小(紫)其(手)を(拂)ひ(ド)有(合)竹(刀)と(も)
つ(て)猿(十)郎(の)額(を)思(は)ず(打)猿(十)郎(其)手(と)ら(へ) (猿)また
手(向)ひ(な)す(の)相(手)よ(なる)氣(り) (小)イエ(く)お(手)向(り)致(さ)
ね(と)女(子)と(ら)へ(て)無(禮)無(体)除(る)は(づ)み(に)思(ひ)ぬ(鹿)相(ト)
詫(る) (猿)も(う)上(の)可(愛)さ(餘)つ(て)憎(さ)が(百)倍(ト)山(拔)又(竹)
刀(と)も(つ)て(小)紫(へ)打(て)懸(る)是(が)試(合)の(立)廻(り)又(あ)り(ト)
小(紫)猿(十)郎(の)手(を)打(是)よ(て)竹(刀)を(落)し(手)の(痛)む(思)入(小)紫
の(付)入(て)打(ふ)と(する)此(時)ば(た)く(に)成(向)ふ(が)野(呂)七(之)助
保(國) (八百)上(下)大(小)に(て)走(り)出(八)百(鹿)忽(ち)女(扣)へ(居)ら
ふ(と)お(な)し(福)保(國)ど(の)に(の)只(今)出(仕) (皆)々(召)れ(し)か(ト)
是(わ)て(舞)臺(へ)來(る)小(紫)を(尻)目(に)掛(八)百(只)今(是)へ(參)り(合

せ(し)は(妻)が(鹿)忽(の)振(舞)の(邊)一(見)聞(仕)る(こ)り(と)玉(菊)當(時)出
頭(第二)なる(大)野(殿)へ(無)禮(の)手(向)ひ(婦)女(子)の(身)あ(る)ま(じ
き(言)語(同)断(し)な(み)と(る)ふ(と)ト(ッ)ト云(小)サア(我)夫(の)
お(詞)お(れ)と(最)前(の)二(度)三(度)私(一)と(と)ら(へ(て)無(禮)無(体)ト(い
ふ(と)制(し) (八百)コ(リ)ヤ(く)壁(へ)道(犬)殿(が)再(三)立(合)を(望)ま
れ(て)も(女)の(道)心(の)儘(に)相(手)に(成)て(物)の(見)事(も) (イヤ)サ(物)
の(道)理(と)辨(へ)す(か)る(は)場(所)で(無)禮(の)振(舞)之(つ)と(整(つ)て
罷(々)あ(れ)ト(よ)る(し)く(思)入(福)助(の)小(紫)の(手)の(内)感(心)して(參
(猿) (福)保(國)殿(に)内(室)を(と)ら(う)ば(ひ)召(る)ト(上)の(妻)
お(替)り(て)某(と)貴(殿)立(合)召(れ)ト云(敵)役(皆)々(日)頃(武)術(の)自(慢)
の(貴)殿(大)野(氏)と(一)人(よ)て(足)す(ト)同(惣)懸(り)イヤ(お)相(手)を(致
さん(ト)立(懸)る(八百)左(程)お(望)み(あ)る(を)辞(退)いた(す)も(如何
お(作)と(元)未(熟)の(此)保(國)ト(い)ふ(と)小(紫)立(合)と(い)ふ(と) (八
百)ハア(内)府(公)へ(聞)え(も)あ(れ)ば(立)合(の)儀(の)相(成)ぬ(ト)い(ふ
敵(役)皆(々)そ(り)や(我)君(が)お(ゆる)し(さ)き(ゆ)え(八百)如(何)も(此
儀(の)免(下)され(と)い(ふ)此(時)い(せん)の(豊)田(團)右(近)習(二人

付(添)出(て) (團)右(其)立(合)佐(渡)守(が)免(し)や(と) (八百)何(立)合(を)
お(免)し(と)る(ト)團(右)衛(門)思(入)あ(つ(て) (團)右(娘)が(鹿)忽(を)戒(先
其(上)試(合)と(辞)退(致)す(の)神(妙)な(れ)と(今)立(合)初(め)應(病)もの(と)
人(の)あ(ざ)け(り)其(處)を(思)ふ(と)豊(田)佐(渡)君(は)代(つ)て(免)し(遣)と
す(福)お(免)し(あ)れ(バ)疾(々)此(場)で(敵)役(然)ら(バ)立(合)召(る)
か(八百)及(ば)す(な)が(ら)お(相)手(に) (敵)ト(リ)ヤ(腕)前(を)見(せ)て
呉(れ)ん(ト)双(方)立(懸)る(此)時(向)ふ(て)ア(イヤ)何(れ)も(お)待(な)さ
れ(皆)々)お(ん)と(ト)向(ふ)富(田)信(濃)守(信)高(銀)之(助) (上)下(大)
小(よ)て(出)て(其)立(合)お(扣)へ(下)され(皆)々)何(も)あ(お)止(ま)さ
さ(し)ぞ(銀)只(今)あ(れ)よ(承)り(は)保(國)殿(只)一(人)と(大)勢(よ
て)相(手)と(な)す(の)近(頃)卑(怯)千(万)夫(ゆ)え(る)友(友)の(よ)し(と)拙(者)野
呂(氏)へ(加)勢(いた)さん(野)呂(七)之(助)の(八百)藏(と)な(有)て(八)
ト(リ)ヤ(拙)者(へ)は(助)力(と)な(ト)慨(ふ) (猿)然(ら)バ(此)場(で)ト(宜)敷
双(方)せ(り)ふ(渡)り(試)合(の)立(廻)り(に)あ(り)ド、 (八百)藏(銀)之(助)敵
役(皆)々(を)散(々)に(打)据(る) (皆)々)負(た)く(團)右(勝)負(の)見(え
た)適(れ)是(よ)く(敵)役(の)無(念)の(思)入(よ)て(負)惜(と)云(ド、 (團)右)

コリヤ娘兼く汝が願も叶ば長居の恐れ早く此場をト返れ
 と云こなし(八百)眞殿の仰せあればト思入小紫の夫も必
 引される思入是非あく腰元付て小紫向へはいる跡團右思
 入有て(團右)傍兩所のお手の内まつた富田氏の手練感必
 の餘り内府公が下し給ひる品こそ有りト奥へ向ひ其品是
 へト奥よてハア、ト新相中の近習三人足付の扇箱を持出
 て八百藏銀之助福助の前へ設す(三人)ソリヤ我々へ此品
 を(團右)家康公が扇子の賜物に披見下され(三人)ハ、ッ
 ト三人箱の蓋を開る此内方墨附出る三人心得ぬこなしに
 て(三人)コリヤ是扇子と思ひの外一万石の傍墨附(團右)
 扇に擬し知行の加増ト云を不審の思入よて三人の將軍家
 がは汰沙ききよ分よ過る知行の高祿何共以て(團右)そ
 こが天下の傍後見徳川殿の威勢よ任して(三人)ハ、ッ心な
 らざる此賜物(團右)取納されぬと仰せ有か(三人)全く以
 て(團右)然らば受納召れ(三人)ハ、ッ有難く頂戴ト墨付と
 かし頂く候、幕明の神主箱を三寶へ藏出で(神主)是なる

箱當社の神木銀呆の本よ埋先有しと堀出し升たト件の符
 を出と(團右)合點行ざる其箱ト皆々不審のこゝろしよて
 と開る中、薙人形へ五寸釘を打たる人形と願文一通出
 (團右)扱ひ呪咀の鐵釘一通讀上召れ(猿)ハ、ッ願文を
 此文官の當時威勢はびこる徳川内府を失ひい幼年の
 軍家は安泰云々と調上る皆々悔りこかし(團右)先君の
 遺言にて天下の傍後見の我君を妬む族が此調伏是ぞ大坂に
 心を寄る大小名詮議致さねば、しき大事先差當て此座
 の人々反逆野心の免無バ其潔白を立ちよト是にて(八
 百銀猿)我々の内府公の推舉にて登庸成たる者共神に
 誓て野心の無ト云(團右)ハ、ッ願母さ各々方ト懐中の一巻
 を出し此神文へ姓名認免此場で血判召れト是よて敵役の
 血判する是は(八百銀福)へ血判しんと云三人文言を見て
 (八百)合點行ざる徳川公の軍勢催促(銀福)血判成バ後日
 の大事ト當惑する(團右)扱ひか身達三人の内府公へ引
 心が(三人)全く以て「ハ、ッ」ト詰る八百思入有て(

八百)富田殿のイザ知す拙者ハ承引仕らぬ(銀)イヤ、
 内府の仰を背かバ只何事も後の思案トこなし有て血判召
 れト是よて(八百)左様ムらバト三人共血判とる團右衛門
 公たど云思入儘に落手致た斯關東の威風を慕ひ各々合夥
 ある上の君よも定一は滿悦(猿)試合の遺恨も此場ぎり(一
 八百銀福)シテ調伏の人形(團右)諸人と試を我計略ト
 是を聞(八百)引ひ引れぬ手詰の血判(銀)我々を味方に付
 (團右)大坂城へ(敵)寄手の手配(三人)聞捨成ぬ一大事(一
 團右)ハ、ッ世の盛衰ハ是非がムらぬト此道具廻る
 ○上田城退去の場本ふたの向ふ一面上田城を見たる遠見
 草土手藪をたばねてはしてある爰に從是西興田幸村領地
 とある一あるはうじ杭爰よ百姓大せの簀笠とさくわ持ち
 居て(大勢)こんど關東の命よよつては領主幸村さまに
 此上田の城を退去とのことろをといふも大坂の秀頼さ
 まへは隨身ゆゑ此間關東か大軍をもつて攻寄たがこつち
 の小勢でも中々城が落すわづらる兵で大軍を喰留たの

であぐみ果とこで幸村さまの兄信幸さまが和睦を乞ひつ
 るよ此領地をお立退るんどかかしひ事でのあいかど百姓
 どもハ慈悲深い幸村に別るとかあるしと皆々泣くゐる爰
 へ横須賀七郎(つる藏)城受取の役人よて出て來り(つる)
 わいらハ何をいたしてとる今日徳川公の命をうけうつけ
 の幸村が居城受取の役無禮あるとゆるさぬぞ百姓皆々の
 おぢひ深い幸村さまとこんど領主がかはつたらとんる融ひ
 目にわふも知れぬと歎きかなしむ(つる藏)ハ榜示杭へ心
 付(つる)さつくわいななり今日よりの浪人の幸村此領地な
 どとしるしあるハ目障りあり此杭とどりのたるといふ百
 姓ハイヤ、ッ少しの間でもは領主さまがお出なさるこ
 りもち取退る事ハならぬ(つる)イヤ身が取退てやらんと
 大力ヒまんあて振ふとすれどぬけぬゆゑつひハ横須賀(一
 つる)足よて榜示をふみよじる是ゆゑとらと幸村といふ
 文字へ泥がつく(百姓)イヤ情けぬい殿さまのお名へど
 ろがついた(つる)エ、何を素浪人の幸村土足よかけても

大事ありとつる藏與へと入る跡皆々なげいてゐる爰へ花
 蓮より幸村(團十郎)同伴大助(金太郎)妻千枝(紫若)穴山
 小助(八百藏)供として出る爰へ(だん右衛門)庄屋佐五兵
 衛にて出る是より百姓みなく、今度不慮の事では領主
 むはあれこんあうなしひ事のムり升ぬ(だん)是よりい
 づれへか落付なさを升とさく(團)とからざる浪々の身と
 むれいづくといつて定めねど紀州九度山へ閑居の志し
 じや百姓みなく、多年の思ふあつたお禮にわたくし共
 も一同殿さまの供して此國をたちのさたいといふ團十
 郎みなく、感心しく(團)これ迄田畑をたがやしわれく
 を養ひくれしその方もわれも思義ゆれとなんぞ我恩
 むらん民百姓の天下の民けつしくわがものあわれぬ
 騒道で徳川家よりかさゝりあらば後日の難義トこれをさ
 いてだん右衛門いろく小前をさとも是よりだん右衛門
 へし稻の穂をどつて(だん)こども骨折て新米をば
 へ納めやうと此通り取られよへ秋の實の此稻穂せ

めてのこれがわれくの志しこれをお持下されし(團)
 誠ももつて其方共がこゝろさし仇に思われよるこび
 稻の穂をもらひ是より紫若金太郎八百藏もいろく別れ
 を惜るゝある爰へいせん横須賀(つる)出て来りヤア
 百姓どもまたその榜示杭をぬきとらぬか(團)貴殿の横須
 賀氏トわが名へ泥のつきしといかれと心よをさめ慈敷く
 ろしくゆるつる藏の斧を持来り(つる)さつくわいある此
 はうじと斧にて榜示杭とたゞさだる團十郎八百藏のくや
 ーがるをどめて適れあるお手柄トわざとつる藏を譽るだ
 ん右衛門百姓大せいり別れを惜む此もやうよろしく幕
 ○四立目紀の國紀の川の場役人替名
 一真田左衛門尉幸村 市川團十郎
 一土井彌五郎兼近 中村芝翫
 一明石掃部之助 坂東家橘
 一横須賀七郎 中村鶴藏
 一穴山小助 市川八百藏

一酒賣佐五兵衛 市川團右衛門
 一幸村の妻千枝 岩井紫若
 一同一子大助 市川金太郎
 一百姓 中村成藏
 一同 市川幸升
 一同 市川升藏
 一同 坂東橘次
 一下部運平 中村芝翫五部
 一獵師九郎兵衛 中村銀之助

○紀の川の場本ふたい道具谷川土橋草土手下水の流れ
 よろしく爰も百姓立懸り居てせりふあつては入る花道よ
 り穴山小助(八百藏)真田大助(金太郎)連立出て来る跡よ
 り妻千枝(紫若)出て是より紫若のいつぞやより夫幸村殿
 の此九度山へ閑居も深い子細のある事と思ふはうきた
 此年月夫の毎日此川で釣のみなされ無益の殺生なざる
 ゆゑに諫めせしをば立腹にてつひに家風にわはぬと離

縁より禿の宿の佐五兵衛方へ今のやつかいの身とよそ
 そなたから詫事してくだされといふ大助の(金)母うへの
 お詞もつともなると男の子の男親もつとが世の習ひ縁と
 さればあかの他人母さまとい言をさせぬと歎きをうくし
 てこあしある(八百)奥さまのおふせのしごとくは尤もく
 し迎も旦那さまへは異見せせどひかりに替る浮了簡との
 内折を見合せわびのしやうもムリ升ふからたふの帰
 りなされませ(紫)また年端も行ぬ大助あかの他人といわ
 んまり氣強ひ嗣よくじやと此歎きみあく、宜敷あつて上
 下へ別れと入る跡上手幸村の(團十郎)釣道具ともち出
 てせりふあつて釣してゐる爰へ佐五兵衛の(だん右衛門)
 出てまた無やくの殺生といろく、異見をなし奥様をお内
 へ歸してくだささといふ團十郎さくもうるさいと取合ぬ
 こなしだん右衛門の見下果たお心よあかりなされと愁
 歎つて別れと入る跡團十郎釣をしてゐる爰へ暮明に出
 た獵人九郎助(銀之助)酒ふるつて出て團十郎に突當り喧

嘩を仕掛る團十郎のわざと障らぬ体にて詫る銀之助さるす立廻り團十郎の木履をとつて投る此木履うしろの暇へは入る此やふ蔭より(芝)土井彌五郎(鶴藏)横須賀七郎にて出て(芝)武士たるものへ泥は穢れし下駄と投打し(團)胸りこかし是より芝断つる藏の異恨の扱置いせん(朋輩)今浪人の幸村殿關東へ隨がり十万石の大名にある事トいろくといゆる團十郎のさへ入す一生がい浪人にて暮す所存武士にあれば命を捨ねばならぬのちが惜いゆる大名になるの断るといふ此内芝断つる藏の團十郎の本心を探ることなし、關東へ隨身あそか不承知あら此投打のゆいさつしるト是よりせりふあつと終ふ團十郎を芝断が木履にてうつ事ある團十郎無念と忍びこれ命がをしひくら恥辱と思わぬといふ芝断の腰ぬけ武士死トよるしくゆつて鶴藏と共ふと入る跡團十郎今の木履のいつれへいつたかトさがす此時下手は明石掃部の介(家橋)出で木履をもち(家)大元師へ木履を奉つる(團)なんと、是

より唐大の黄石公も張良の故事といいて大坂の秀頼公へ隨身してくれと頼む團十郎の今も關東より味方よつけどわきど仕官の望みもあらずと断る(家)は決心どあるからん是非があつと兩人よろしくせりふあつて家橋別れは入る跡に團十郎もはや秋の日も西へかたひけは歸宅いたさうと釣道具をかつき花道へゆく此時上手よりいせん(銀之助)鉄炮にて幸村を討ふとして火蓋をさらふととる團十郎これをさとり銀之助をよらひ是にて倒れわれと我鉄炮の火ふたされてたまふうたれ銀之助苦しみ倒れる是と一所に上下方芝断家橋出てだんまりより團十郎の釣棹をくつき花道へゆく此もやうよろしく幕

○五立目九度山村境の場 役人替名
 一 眞田幸村 市川團十郎
 一 同 大助 同 金太郎
 一 酒賣佐五兵衛 同 團右衛門
 一 穴山小助 同 八百藏

一 明石掃部之助 坂東 家橋
 一 幸村妻千枝 岩井 紫若
 一 下部運平 中村 芝歌五郎
 一 百姓 四 人
 一 紙屑屋や九八 坂東 喜知六
 一 横須賀七郎 中村 鶴藏
 一 土井彌五郎兼近 中村 芝断

○村境の場本ふたいの道具上手番小屋敷たみ松の立木山の番割爰は百姓(四人)酒よよつてゐて此頃爰らへ商内爰来る酒賣の佐五兵衛の勘定いつでもよよと振舞同様にふも諸白の荷とあづけてどこへかいつたト皆々踊つてゐる爰へ横須賀(鶴藏)土井彌五郎(芝断)下部運平(芝歌五郎)出て來り此体を見てかねて幸村よ不審あらば直よ討手の手配りと領主淺野家と示しあはせ百姓どもも張番さするに酒にあつてたわいあさひ不届しくと此筋よろしくあつて(芝)シテ酒をうりに來たる親仁こそ敵の間者

に疑ひなし其ものをこそへ引いだせ是は百姓下手へは入り直酒賣佐五兵衛(だん右衛門)を引立出る(芝)われらいつくの者だ(だん)へい私しい禿の宿のもの(芝)生國(だん)志州の鳥羽でムリ升(芝)詞の國の切手信州生をでぢらうがさト見らひされる(だん)をろそしひは眼力いかにも信州上田在のもの(芝)いよくうさんなやつト芝歌五郎に云付懐るをさがして守り袋を引いたす此中仁王の彫し目貫の片し出る芝断こなしあつて(芝)この目貫のそちが所持か(だん)その目貫の先祖より傳來の品しさいあつて今いかくく物語る芝断これをさし扱いたづぬる我實爰かどよろしく思入此筋あつてだん右衛門をゆるしてやる芝断これにて善心に立歸るこあしあつて道具廻

○同幸村閑居の場本ふたいの道具よろしく爰に幸村の(團十郎)大助の(金太郎)小介の(八百藏)眞田の(紐うつてゐるよろしくせりふあつて爰へいせん)の百姓(四人)出ていづもよく精が出ますト是より佐五兵衛酒をふるまつて

もらつた事をはなす(團十)村の衆に酒をふるまつて進せ
たけれど今浪人の身の上の賣代なしても香せたいとい
ふ爰へ(喜知六)紙屑屋出て出でるんでお拂ひのムリ升ぬ
り(團)てらと幸ひ紙屑屋ト奥方立派な刀どもち出てこ
れを買てくもといふ八百藏見兼て旦那さまにのるんば浪
々あされたとて武士のたましひを屑屋ふせいようるとい
ふの見下果たといふ(團)昔しの武士なまど今の平民ある
つたときがし刀は用ひあ(喜知)三兩も買ふといふ(團)
わまり安直なまどまつて酒を振まはふと爰へ佐五兵
衛の(だん右衛門)出てこれ旦那さま見下果たあなたさま
と刀をうり拂ふをどめいろく異見をする是よて終に喜
知六へ一分やり刀を賣せぬ此喜知六廻しものよて幸村の
本心と見ぬて表へ出る跡せりふわたりだん右衛門八百
藏は入る跡へ千枝の(紫若)出て内をうかがひ只ひとめ夫
と逢ふといふ是をさへ付大助(金)出て去られた母上
あといはいはす語らぬ愁歎ある團十郎こそをさへ

(團)未練を女去られた内へ参るのり定めて鏡を置いて参ッ
たゆゑそれよ心ひかされてまゐつたかト鏡と出して紫若
へわたしよそながら暇乞ををる是よて紫若も一生の別れ
かどのび上りこれ心と残して向ふへは入る跡門口ふて
めせん喜知六芝歌五郎内の様子を伺ふ此もやうよろし
く幕引返しよある
○大詰幸村閑居の場ふたいの道具閑居のてい爰は幸村(團十郎)大助(金太郎)張ぬ死筒を張てゐる金太郎刷毛よ
て粘をつけてゐる是を幕明より土井彌五郎(芝翫)手鎧を
もち運平の(芝歌五郎)兩人伺ひひて(芝)心知れざる奥田
がふるまひ猶も下家へ忍び入りやうをを探らんと言合せ
芝翫の下手しのふ芝歌五郎の向ふへは入る跡(紫若)の千
枝出てよろしく夫よ別れをつげる件よろしくあつて入
る跡幸村不便だといふこゝろ爰へ向ふ明石掃部之助(家
桐)出て来り大元帥の迎ひに参つたといふ(團)又け
ふもまゐられしか度くかすめなれと武門を捨く民と

あし此幸村再度君よ仕へる所存なしと斷る(家)は尤も
よのムれども天下の大小名過半の關東へ隨身させ何と
せ大坂へ助力でくれと頼む(團)のるんで味方のいた
さぬといふ(家)然らばせひお及ばぬ一命もらつた刀と
ぬき切てかゝる團十郎是を刷毛よて受る立廻り爰へ向ふ
より小介(八百藏)出て注進くは是よりかねて土民と
なつて忍びをる家來のもの相圖にしごかひ馳あつまる斗
りやく闘つたりといふ(團)わが計策のどこのひし上のか
味方さんとは是より團十郎本心をあかし大坂方へ味方な
さんと是迄のはかり事を物がたる家桐よろこぶ此時うし
ろか芝翫伺ひ出で鎧にて突くる(芝)大坂方へ味方の
幸村たいひどのと是にて家桐と渡り合ひわざと大助(金)
は横腹のつかれ苦しむ團十郎徳川家より隠し目付少
年の大助が手にするものあらす是に子細あらんとい
ふ芝翫是にて本心をありしとのふ佐五兵衛を詮議の時守
袋に在玉の目貫をきゆるわが實父の佐五兵衛ならんと始

めて知り幸村殿のわが爲よも領主のれを知らずといづぞ
や土足にりけし天罰をそれゆゑわさど手にあつて果ると
いふ爰へ佐五兵衛(だん右衛門)出て扱の俸をたかど
是より四十二のゴツ子ゆる目貫をうへて諏訪明神の鳥居
先へ捨たる我子かと親子の名りあし愁歎ある此件宜くあ
つて團十郎の張振筒を大坂へ入城の土産にせん爰へ又八
百藏と芝翫二役の注進來て見張りの百姓ども昔酒を
ひて正体あし此間爰をぢのび大坂へ入城あるべしと
いふ是より幸村(團)の佐五兵衛に首付酒とふるまひしよ
り妻千枝は鏡を與へ自害をすめし事本心をあかし昔
く大坂へ入城と花道へゆく此時うしるは横須賀(つる)
出て幸村やらぬといふ(團)かねて地中に埋置大砲の發す
る時こく今よ五体のこなみちん(つる)アヤと胸りかどろ
く此内大砲發して家体仕かけよてくづれる苦苦しむ是
を見て心地よしと昔く花道へゆく此もやうよろしく事
○中幕今様釣狐 役人替名

今様師梅津新太郎
 同小倉山太夫
 山太夫伴小倉千之丞
 牛尾傳平
 日尾東六
 門番庄兵衛
 庄兵衛女房おりん
 門弟
 山太夫妻
 同下女

市川團十郎
 中川家
 坂東
 市川團右衛門
 市川團十郎
 同川幸
 同東升
 同東橋次
 坂東
 岩井此系
 長唄はやし連中

○今様師小倉門前の塙本舞臺常足の二重向ふ茶壁暖簾口
 止手地袋戸棚此上狂言謡曲本杯を載ゆり下手冠木門是へ
 小倉山太夫と云表札を掛都て小倉宅門前の道具爰に幸升
 本屋の女房にて本を綴てゐる小倉の下女(女形)二人腰を
 掛てゐる(幸升)けんは内の子那の六十一のお祝でお忙
 しふりませう(下女)お盛所の仕出屋が大勢今にお客の
 お出遣一ト思付お来た云(幸)當時お狂言で且那に續
 く者多く又夫よ若旦那が好故目の寄所へ玉でお門弟も皆
 親と手(下女)六十一のお祝を被成も實にお弟子方へお狂
 言の御授が有とのと(幸)けんは家の御傳授物釣狐と

若旦那がお勤被成とやらト此筋宜敷渡り(下女)是も付て
 もお門弟の新太郎様は酒故といつどや旦那の御氣う
 け今何所にお出やら以前で有外のは門弟の上席で何
 か御傳授物のおゆるしが有うのに(幸)その梅津新太郎様
 の眞葛原へひつそくあるさき今の曲かお暮し此お目出度
 でどうかお勤當がゆりる様は新造さまへ内々願つて置
 ト此筋三人へ渡る爰へ下手門の内(升橋橋次)橋一本差
 門弟にて出て来り(升橋)オ、此方衆の爰も有られたが先
 刻柄奥で呼で、有ト是まで下女門の内へはいる跡(幸)お
 二人様まだお狂言の始りませぬかト是(升橋)此家の
 主人庄兵衛殿が彼梅津新太郎殿が詫事と内々は新造まで
 願しゆゑ師匠お段々話せし處物堅い師匠ゆゑ中々ある
 す氣色なし何は酒が好だと言て門弟内で一と言て二と
 い勝た葉を持乍ら勤當受しは残念ト云(幸)私共の庄兵衛
 は小倉様のお蔭で門番を勤先傍ら狂言本を綴るのが内
 職夫も付ても惜いの梅津さま(升橋)イヤ酒さへ傾みな

されより必ず勘氣は免ふ成んト兩人も共今一逼師匠へ
 詫の口添を致さうト升橋兩人門の内へいる跡向ふ梅津
 新太郎(團十郎)肩入の着付一本差深網笠浪人の指らへ
 猿十郎(門番庄兵衛)も付て出て来り(團十郎)此程お頼
 み置る師匠へのお詫の如何でムるト聞(猿十)此間もは
 新造へ内を願ひしが何れ旦那へ折を見て上て見様どの
 お詞も兩人舞臺へ来る(幸)オ、お返りが(團)けんは厄
 介に相成でムらふ(幸)何にしる新太郎様がお山の事を
 蘇遺様へ申上て見やうト幸升門の内へはいる跡奥にて鼓
 笛の音聞える團十郎おかし有て(團)ア、ハ花子じやが誰
 が勤めるか(猿)新太郎様那方お羨しふり升か(團)ム、
 トじつと思入猿十郎の浮尤でムり升るト涙拭ひ是方猿
 十郎と今度小倉山太夫様の六十一のお祝で三日此方のお
 客様は門弟の衆達も綺羅を飾てお出故お前の事を思ひだ
 しは勘當のお身で無バ立派な何かお勤爲らふにどかいと
 しよう思ふトおかし(團)以前の好身お歎き呉るこゑたの心

切いつどや嵯峨所が珍好まで釣狐を勤めよとの仰せ其
 折師匠の病氣ゆる拙者も名代勤よと師の命受て立出し
 に其日の雪の日頃々嗜む酒と終一呑飲しが此身の落度
 て酔酩故は釣狐を見事に仕損じ終り師匠の勘氣を受後悔
 なせと詮術なく夫々酒の飲ありと禁酒おして諸國を廻り
 諸流を渡りて修行爲りけんお目出度は何卒此身のお詫を
 し度ト此盛詞宜敷ある(猿)根が酒柄の御勘氣ゆるは改心
 爲たら定めしを免なざるで有らふ(團)責てお祝の末席へ
 ありと列あり度ト宜敷こなし爰へ以前の(幸升)出でば新
 造と若旦那がお出され升たト門の内山太夫の妻様(
 まげ松)同伴小倉千之丞(家橋)出て来り(家)そちの新太郎
 か(團)ハッは勘當深りし身でお目通りも恐多し(まげ
 松)夫も門番の庄兵衛夫婦が詫といひ禁酒爲て詫ると有
 ば(家)目通ど苦からぬト團十郎土間へ手を突て居るを
 いたわるこゑし(團)勘當受し足掛五年も相成も個様よ
 お年を召升たかトまげ松と見て思入(まげ)も便り少あ

流浪の面も瘦て見えるト云(團)拙者も師匠の大恩を忘却
 なして流浪の身もあり一方あらぬ難義を致し升た(家)汝
 が家出致せし母上よも忘れなく嘸難義を致せらんと
 毎度思ひ出でて涙にお呉みされしが今日無事に歸京あ
 し改心致すとの事故父上へ兩人方お詫をすたぞ(團)ソ
 不疑なる私しめを左程迄に(家)おわび致せと外門弟のま
 だしおならぬと未だお免しなし(まげ)能お祝の折と思ひ
 感ずお免し有んと悴共々詫たれと未だお聞濟なされぬゆ
 ゑ其方本意なく思ふで有らふト歎く(團)ソリヤは勘當
 のお免し無かば兩人お返事を相待しに夫でもお聞濟な死
 上の願の綱も切果し、宜敷歎く思入ト猿十郎幸升共々
 歎き此上のせめて新太郎様に餘所乍ら旦那のお顔でも拜
 交して進せ度ト云(團)勘當の身で恐れ有と何卒一ト目ト
 願ひ是より繁松家橋も不便だと言さし有て此上の勘門
 付ては勘當の勘氣と業りし釣狐を今一度勤め恥辱と雪がん

と晝夜の困苦夫も今の叶ぬか(家)ソリヤ流浪の身を以
 て修行致せしと(團)未熟乍らも寝食を忘れ修行した
 云此時門の内方下女出でて新造様旦那様がお尋にふり升
 ト是と聞愛へ来たの沙汰無に新太郎又後逢逢升ラト家橋
 まげ松下女奥へ遣入愛へ牛尾傳平(團右衛門)日岡東六(一
 つる藏)銚子さかづき肴ももち出て(だん)た今
 久し死新太郎殿止三人よろしくせりふ渡り是より只今此
 新造と若旦那がしきりと即匠へわび中まづ其内久し振
 のことなれば酒の二ツのみたまへとははつるだん酒と
 すいめる(團)その酒ゆゑお此身の勘當今更酒のわがみの
 敵いつせの禁酒いたした(づるだん)そふでもあらうがお
 目出度酒をばすしめる是にて團十郎の心をひいて見
 ることなし團十郎ははんとし禁酒したといふ思入にて此
 道具廻る
 ○同奥座敷の場(芝)飯の小倉山大夫へいせんの(家
 橋まげ松)ふたりして新太郎の勘當とわびてゐる(芝)飯

の勘當のるしやりたけれど外門弟の手前も恐ればどふ
 しても免と事ならぬといふ(家)左様おれせめてお顔
 なりと(まげ)おはしてやつてくださりませ(芝)イヤ
 それもならぬといふ此いせんより(團十郎)の新太郎下
 手垣根の蔭へ忍びよとあがら師匠の顔を拜しぬる(芝)是
 をしれどわざと知らぬ顔にてよろしく双方愁歎あるト愛
 へいせんのつる藏だん右衛門升藏橋次出て門弟一同よて
 新太郎の勘當と詫る(芝)なんとわびても免せぬが今日舞
 たいよ於て悴が釣狐を勤ると名代をさせ夫を一の功に立
 く(皆々)そりやお勘當お免下さり升か此模様よろしく幕
 ○釣狐の場(松)の菫の羽目板愛に長唄はやし連中な
 らび(家橋)獵人にく毎夜愛へ狐を釣に出るといふせりふ
 ある花道方(だん)衛門つる藏)出てこれも獵人仲間よて出
 て来り家橋の酒をのませるといふ此振事よろしく愛へ(一
 團十郎)旅僧のこしらへて出てわれの年経る狐なるが
 獵人の太郎作がわが仲間と畏よかけるゆゑわれ伯父の白

藏主に化て異見をしやうと是より家橋は養生とキリ
 いふ家橋の伯父お坊の異見ついで殺生のやめやうとわざ
 と畏よかける(だん)腹立上戸笑ひ上戸泣じやうと
 のこなしあつてだんつるは入る跡團十郎鼠の鼠のてんぶ
 らまたまらず狐のみえよろしくあつてすつとは入る跡(一
 家橋)の狐をどつてやらんと愛へ(團十郎)狐の面と冠り
 狐よて出て鼠の鼠をどらうととる家橋わなにかゝる(芝)た
 く(團)こんくわいト啼愛へいせんの山大夫の(芝)
 飯)出てあつたれ功があらわれた是よて勘當ゆるした(一
 團)エ、有がたふふり升ト悦ぶことなし此もやうにて幕
 ○第二番目堀川の場 役人替名
 一 猿廻し與次郎 中村 芝
 一 井筒屋傳兵衛 坂東 家
 一 井筒屋五郎兵衛 岩井 三
 一 與次郎の母 市川 八
 一 輪進屋八兵衛 市川 八
 一 釣鐘屋權兵衛 竹本 連
 ○堀川の段(だん)與次郎内世話場の道具愛よ稽古娘與次

郎の母(まげ松)に三味線を教えられ島部山云々のせりふ
 渡りけいこ娘は入る跡(まげ松)娘がうきげいしやの勤め
 與次郎が孝行と此せりふある爰へ與次郎(芝瓶)猿を脊負
 ひ歸り来る是より(芝瓶)の目見えぬ母へいろく心配
 して貧窮を見せぬやうさあしある(芝瓶)飯をしらへるぞ
 よろしく爰へ掛乞の(八百藏)つる藏(だん右衛門)「サア
 〳〵来たぞよ〳〵トは入る(芝)これのよふお出なされた
 ト是より(八百)つる(だん)のいけづるひ與次郎けふは是
 非拂わつしやとトふを芝瓶母へさうせまふといろく
 こゝろあつて我若物とぬぎ櫃伴いちまいあつて日延を
 いふ是とさし掛乞三人の與次郎が孝行に感心し是迄の貸
 もさつぱり貸てやると思ひ〳〵のこゝろあつて三人向
 へ入る跡にて與次郎妹の俊の書置を見て傳兵衛を恨む
 事よろしくある爰へ傳兵衛(家樹)お俊(三津三)出て格子
 の外へ兄や母へ暇を告る(芝)扱の八殺しの傳兵衛めト
 棒を持立かゝる此事よろしくあつてお俊傳兵衛内へ入り
 譯をはきし此世の名残りといふ是まで(芝瓶)猿を廻し妹
 と傳兵衛を落しやり名残を惜といふ此もやうよろしく幕

○大切所作事 道成寺の場 役人替名
 一 白拍子花子實の狂言師右近 中村芝瓶
 一 所作 坂東家樹
 市川團右衛門

一 同
 一 大館左馬之助照國 中村福藏
 〇本ふさの道成寺の道具下手に釣鐘だんたらの幕女人禁
 制の高札爰へ所化(家樹)だん右衛門、鶴藏、福助)出て來
 りせりふあつて股ぐらより酒徳利などをたし酒をのひ爰
 へ(芝瓶)白拍子あつて出て鐘供養を拜ませたくま頼む所
 化皆〳〵の女人禁制とあるから拜ませる事叶ぬト是
 にて白拍子に何か踊つて見せるといふ長唄より是より
 芝瓶よろしく振事あつて能頃うへの衣せうをぬぎ狂言師
 の男形ある所化皆〳〵扱の男であつたかと又是より芝
 瓶男にてふり事ある爰へ大せいの取巻出て是より花や
 かな所作立になり鐘入までよろしくあつて(打出し〳〵)

三月七日 御届 (定價六錢)
 三月 狂言
 春木座新狂言すどがき 壹冊よき切
 各繪双紙屋三有之候間御求ヲ乞フ
 東京 出版人 大島直次郎
 書林 彌左衛門町十二番地